

隣人の沈黙

▷4◁

ワープの画面に、文字が次々に打ち出された。

「エイズ」「タン」「ツバ」「ゴキブリ」「野宿」「麻薬」「不法外国人」。

二月末の夜、大阪府茨木市にある新興住宅地。不法就労や密入国で退去処分を受けた外国人を一時的に收容する施設の計画が持ち上がり、地元的那(こぼり)地区の住民が反対を訴える。ビュウクりに集まった。

出来上がったビラには「一時的な検査でエイズ患者を見つけ出せるのか」「收容者のタン、ツバは雨水に混じり、ハエ、ゴキブリが病原菌をまきちらす」と刺激的な言葉が並んだ。ビラは投げ込み、あるいは回覧板に添えられて家庭に入った。

移ってきて五年目の女性とに話していると直感し(◎)きは勤め帰りに、近所のこと。「科学的ではない」と女性に呼び止められ、建設反対の署名を求められた。

「エイズの水でコメが育つ

エイズ

外国人をエイズや伝染病

ビラづくりに加わった人

偏見ありあり回覧ビラ

前を聞いた。近所付き合いをきくしゃくさせるのがいやだった。別の女性とは、「何も意思表示をしないのは賛成と同じ」と班長からビラと署名用紙を渡された。転居して間がなく、「近所からいつも見られている」と感じていた。離れて暮らす父母の名も書き入れた。

の発生源、と決めつけるようなビラはまずいのではないかと、その声が住民の間から出たのは一、二週間後だった。その後、地区外の革新系市議を中心に強制送還に反対の立場から「茨木入管收容所建設問題を考える会」が発足、「エイズ・ビラ」に対して「外国人への偏見とベツ視」と批判した。

夏になって、大阪入国管理庁は、住民から求められた対話集会に「みなさんと異質の反対運動の人々を会場に入れないほしい」と条件をつけ「考える会」のことを指していた。

大阪市に働きに行っている在日韓国人二世(◎)の自宅にも回覧板は回ってきて、隣に渡した。しかし、反対運動には加わらない。「生活を守りたい心情はわかる。でも、運動に携わると、外国人としての自分が際立ってしまうぞうだ。風向きが変わって、ふと気づくと、こちらに吹いてくるかもしれない」

社会保健文(◎)

住み良い茨木の環境を守るために、安全管理センター(仮称)を本入国管理総合センターとして、建設反対の署名を集める。



住民無視の強制退去者收容所建設断固阻止

建設絶対反対

私たちは言う。「それぞの疑問や不安をメモにして持ち寄った」「不法外国人からエイズを連想した。入国管理局のパンフレットにあった「麻薬」という文字に刺激された」「收容施設は怖い、という気持ちが先に立った」

九月には、市内の目抜き通りに三百五十人が集まり、「建設反対」のちよう井喜代司委員長(◎)は「外

「日本人はみんないいです」というベトナム人男性(◎)はビラも署名簿も見ることがなかった。日本に来て八年になる。町工場の仕事を終えた深夜、自宅で「最近、帰化を考えている。ベトナム人のままで、語れないことも多いのです」と話した。

「みる・きく・はなす」はいま第0部